

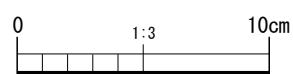
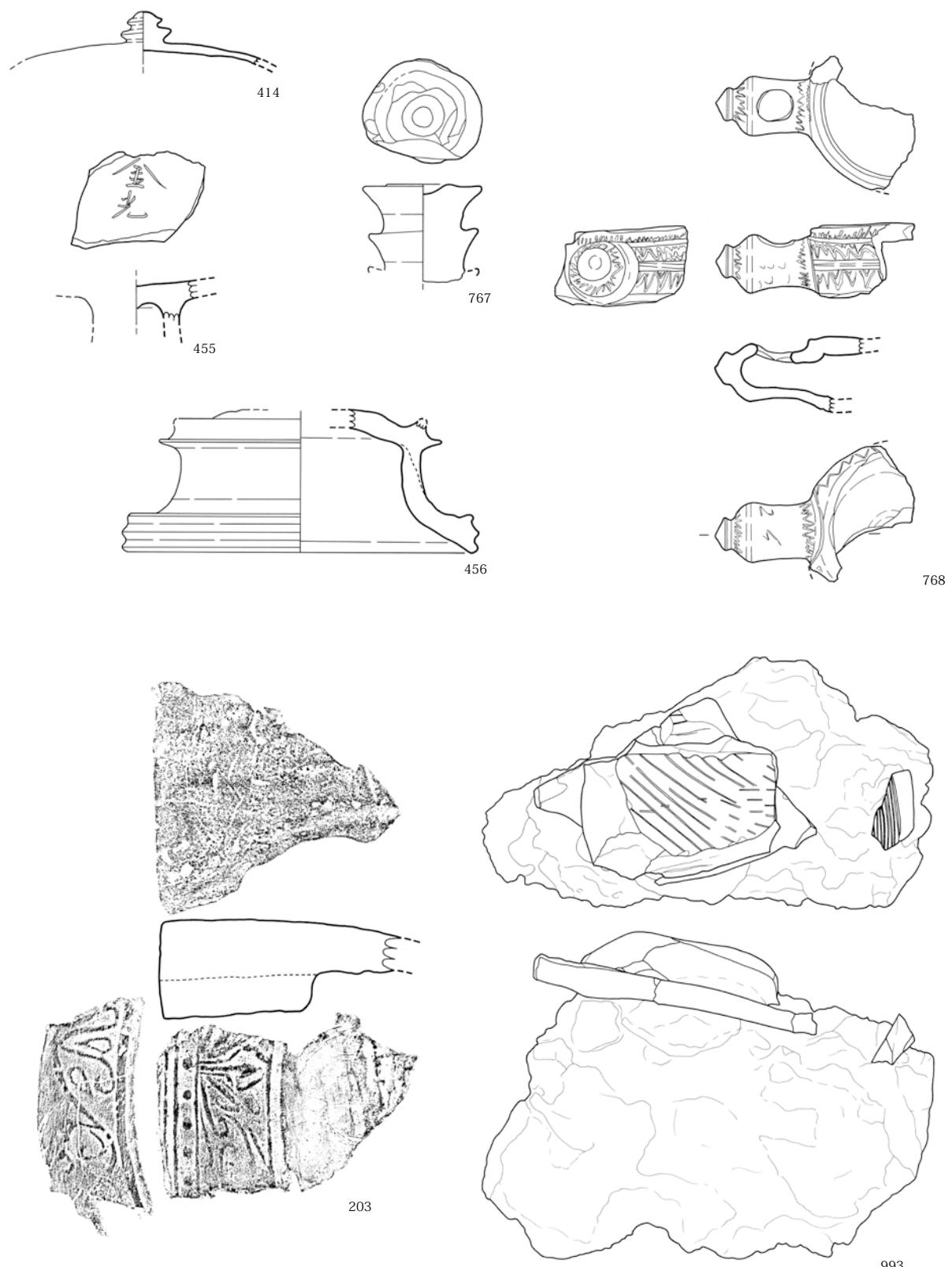
第V章 まとめ

第1節 遺物・遺構からみた古代における古城第2遺跡の性格

古城第2遺跡から出土した古代に属する遺物の中には、本遺跡を特徴付けるものがある。ここではそれらの遺物と、関連する遺構の検討を加え、若干の検討をおこないたい。

まず繰り返しになるが、第234図に再掲した遺物について確認しておく。414は須恵器壺蓋である。つまみの形状が特殊で塔形となる。455は須恵器高壺で、壺部内底面に「金光」の刻書が施されている。この文字は非常に整ったもので識字者の存在を伺わせる。この「金光」については、国分僧寺の正式名称である、「金光明四天王護国之寺」の「金光」と想定される。他地域の事例をみると、上総国分僧寺では「金寺」の墨書きが施された土師器壺が出土している。管見では「金光」の刻書、墨書きが施された他の事例を確認することはできなかったが、古代という時代背景とその文字から、国分僧寺との関係性が高いと思われる。767は須恵器香炉蓋のつまみである。残存部分で三段のかえりが確認される。頂部に凹みがみられるが、穿孔は施されておらず、つまみ部分から香が出る構造にはなっていない。456は須恵器円面硯（圈足硯）である。残存部分においては使用痕がみられないことから未使用硯と思われる。768は須恵器把手付中空円面硯である。波状文を多用した装飾的な作りである。456の円面硯とは異なり、本資料は硯面が研磨され非常に滑らかになっている。ただし、肉眼観察によるものであるが、墨の付着はみられない。203は軒平瓦である。瓦当部が厚手で重厚な作りである。顎面にも施文されている点が特徴である。993は窯体である。須恵器甕と思われる破片が付着している。

一見種別もばらばらで、纏りのない遺物群であるように思えるが、これらは古代における古城第2遺跡の性格を考える上で重要な遺物である。203の軒平瓦や456、768の硯からは官衙もしくは寺院の存在が伺えるが、767の香炉の存在を加味すると両者の中でも寺院の可能性が高い。しかし古城第2遺跡の遺構をみると、ある程度の計画的な建物配置はみられるものの、寺院を想定させるような大型の掘立柱建物や規格性の高い建物配置は確認されていない。また軒平瓦は2点のみの出土で、軒丸瓦は出土しておらず、瓦全体の出土数も31点（破片点数）であることから、瓦葺きの建物が古城第2遺跡に存在したとは考え難い。これらの点から、周辺の近接地に存在した可能性は否定できないものの、古城第2遺跡が寺院であった可能性は低い。さらに456の円面硯は硯面に研磨痕がみられず未使用品と考えられ、768の把手付き中空円面硯も研磨痕はみられるものの墨の付着がなく、未使用品であった可能性が高い。つまりこの硯は本遺跡内において使用されたものではないと考えられ、このことからも寺院や官衙以外の性格が想定される。ただし「金光」を始めとする刻書土器の存在から、識字者が集落内に存在したことは確実であろう。この「金光」の刻書は「金光明四天王護国之寺」の「金光」と想定されることは前述のとおりであるが、香炉や硯、軒平瓦が出土しているものの、本遺跡がその消費地とは考え難いという点を加えると、国分僧寺と関係を有する集落である可能性が高いと考えられる。軒平瓦に関しては、日向国分僧寺では同範のものは出土していないが、部分的な調査のため、今後の発掘調査によって出土する可能性も否定できないのではないか。993の窯体は、通常流通する遺物ではないため、本遺跡に近接する位置に須恵器窯の存在が想定される。この点に関しては、441のように製品として流通しないような焼き歪みがみられる須恵器や、焼成時に破損したと思われる460などが出土していることからも追認できる。さらに本遺跡から古代に属する粘土水築土坑や粘土採掘土坑と想定される遺構も検出されていることに加え、瓦も出土していることも考



第234図 古城第2遺跡特殊遺物実測図(S=1/3)

ると、本遺跡は瓦陶兼窯に近接した瓦・須恵器製作集団の集落と考えられる。この視点から本遺跡の遺構を見直すと、12 mを超える非常に長い桁行をもつ掘立柱建物が注目される。この掘立柱建物は長大な建物規模の比して、柱穴規模は通常の掘立柱建物と変わりがなく、集落の中心的な建物とは捉え難い。これらの掘立柱建物（掘立柱建物 10、9・12、18）は、本遺跡が瓦や須恵器の製作遺跡であると考えると、京都府上人ヶ平遺跡で確認されている製作した製品を乾燥させるための建物の可能性がある。

以上の点を総括すると、古城第 2 遺跡は日向国分僧寺へ製品を供給する瓦陶兼窯を営む、瓦・須恵器製作集団の集落である可能性を指摘できる。実資料を比較することができなかったため断定はできないが、本遺跡では笠瀬氏によって分類された日向国分僧寺出土瓦（西都市教委 2009）の内、格子目 3 類の平瓦（204、841・911・994）、縦縄 3 類（769・909・910）、横縄 3 類（912）が出土している。日向国分僧寺への瓦供給窯としては、本遺跡から南西 1km 位置に所在する下村窯跡が挙げられる（宮崎市教委 2008、西都市教委 2009）。下村窯跡から供給された瓦は凸面縄目叩文瓦と凸面平行条線叩文瓦であり、凸面格子目叩文瓦は下村窯跡では 1 点のみしか出土していない点から、他窯産と想定されていた（西都市教委 2009）。今回、窯跡そのものは確認されなかったが、古城第 2 遺跡から凸面格子叩文瓦が出土し、尚且つ出土遺物や検出された遺構から、その生産遺跡と想定されることから、古城第 2 遺跡に近接する位置にある窯跡が、日向国分僧寺に凸面格子叩瓦を供給していた窯跡と想定される。

窯跡そのものの調査ではないため比較する意味は乏しいかも知れないが、下村窯跡と出土した遺物を比較すると、下村窯跡で 9 世紀代に盛んに生産される長胴壺が、本遺跡では少数であり、その反対に下村窯跡で確認されていない長頸壺が出土する傾向にある。また、高台付壺（下村窯跡の報告書では高台付椀）の出土傾向をみても、下村窯跡では、器高が高い、いわゆる椀形態のものが中心であるが、本遺跡では器高が低い、いわゆる壺形態のものが中心となる。これは遺跡の中心となる時期の差によるものと想定される。本遺跡は、出土した高台付壺の形態から 8 世紀後葉段階を中心とした集落と考えられ、9 世紀代になると遺物量が減少する傾向にある。一方、下村窯跡は、8 世紀中葉段階から生産を開始しているが、最も盛んに生産が行われる時期は 9 世紀前半である。このことから、本遺跡に近接する窯は、極短期間で操業を終え、生産の中心地が下村窯跡へと移動した可能性がある。

今後は、今回は至らなかった本遺跡出土遺物と、日向国府、日向国分寺を含め、消費地の出土遺物の比較検討を慎重におこなう必要がある。また、古城第 2 遺跡近接地において、窯跡が確認され、研究が進展することを期待したい。

参考文献

井上尚明 1994 「コップ形須恵器の考察－奈良時代の計量器について－」『考古学雑誌』第 79 卷第 4 号

西都市教育委員会 2009 『日向国分寺跡』

宮崎市教育委員会 2008 『下村窯跡群報告書 II』〈遺物編〉

第2節 古城第2遺跡における建物の変遷について

古城第2遺跡では1区、2区あわせて竪穴住居14軒、掘立柱建物33軒が検出された。うち竪穴住居と掘立柱建物26軒が古墳時代から古代にかけて、掘立柱建物7軒が中世に属するが、本節では各遺構からの出土遺物により時期を細分し、遺跡全体での建物配置の変遷を概観したい。なお、特に掘立柱建物などは性格上遺物の出土が少なく、必ずしも正確な時期比定が可能ではないが、その場合、隣接する宮ヶ迫遺跡での検討（宮崎県埋セ2013、宮崎市教委2014）において有効であった建物の向き（軸）によりA～Gの7期に分類した。

当遺跡における最初の段階は5世紀後葉である（A期）。竪穴住居1軒が遺跡のほぼ中央で検出されているが（1区竪穴住居3）、建物によらず当該期に比定される遺構は他にない。小規模な迫地形を挟んで西に隣接する宮ヶ迫遺跡では当該期の竪穴住居が数軒検出されており、集落の中心は宮ヶ迫遺跡にあったと判断されるが、古城第2遺跡、宮ヶ迫遺跡あわせても、A期段階ではまだ大規模な集落ではない。

A期からしばらくの空白期を挟み、6世紀末から7世紀初めにかけて（B期）竪穴住居7軒、掘立柱建物3軒が営まれ、この段階から遺跡全体が集落域として用いられている。その中心となる建物は床面積70m²以上の1区竪穴住居1であるが、集落域の西端に位置しており、その周囲に小型の竪穴住居および掘立柱建物複数が配置されている。

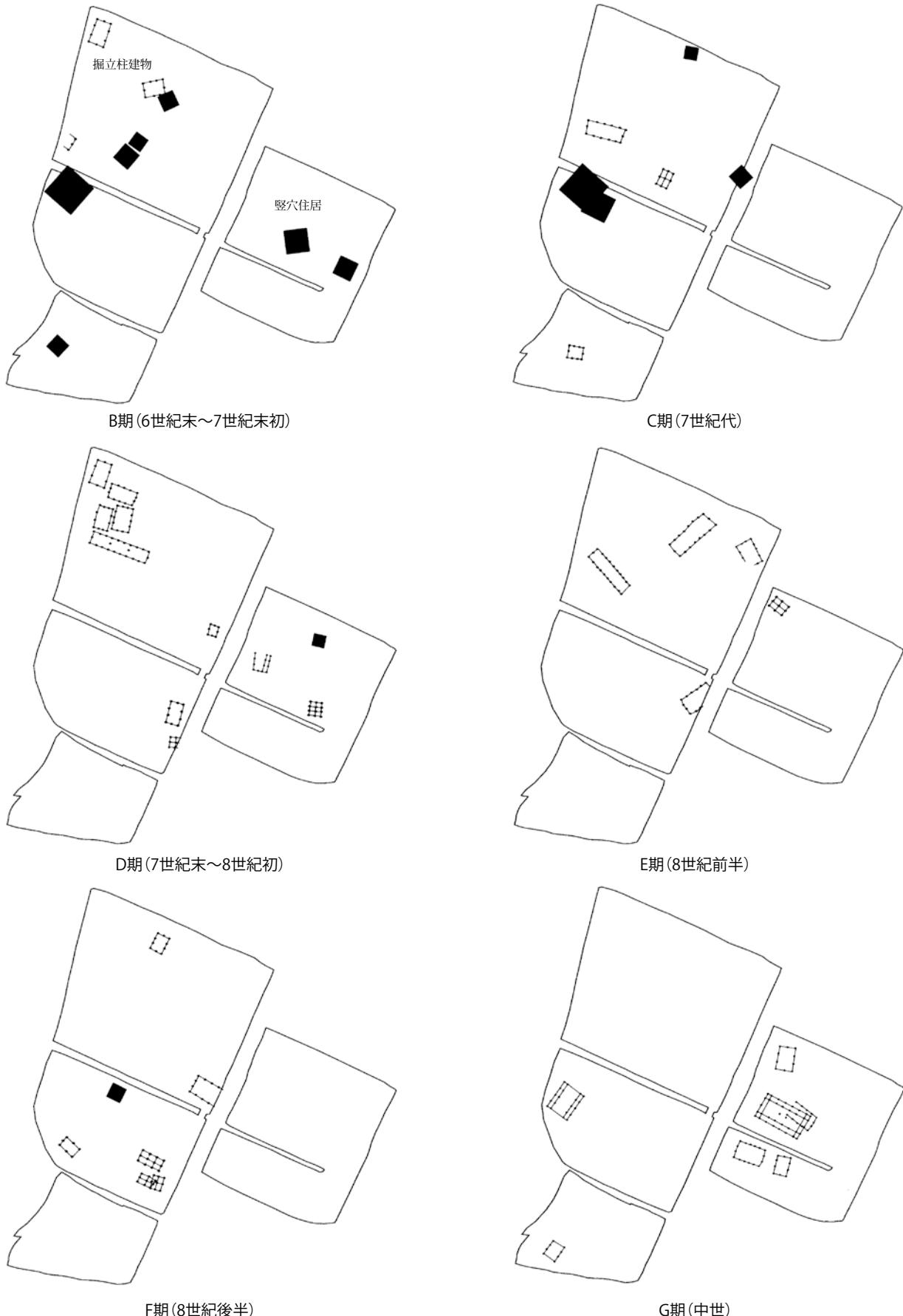
続く7世紀代の段階（C期）にも、前段階の大型竪穴住居が建て直されて存続している（1区竪穴住居2）。その周囲に小型の竪穴住居および掘立柱建物を配するのも同様であるが、この段階から総柱建物による倉庫が新たに加わっている（1区掘立柱建物16）。

7世紀末から8世紀初めにかけて（D期）竪穴住居が激減し、替わって掘立柱建物が多数建てられるようになる。総柱建物（1区掘立柱建物6、2区掘立柱建物8）にくわえ、長大な掘立柱建物（1区掘立柱建物9・12）が建てられる。一辺15mのこの建物は、前節に述べたように須恵器、瓦等を乾燥させるための建物である可能性があり、また当該期唯一の竪穴住居（2区竪穴住居2）は一辺3.5m前後と小型で、住居内に用途不明の土坑をともなう、何らかの作業場と思われる建物である。この段階には大小とり混ぜて10棟の掘立柱建物が建てられており、大規模な生産遺跡としての色合いが濃くなるといえる。

8世紀前半の段階（E期）にも長大な掘立柱建物（1区掘立柱建物10、同18）と総柱建物（2区掘立柱建物6）のセット関係は存続している。ただし、建物は掘立柱建物5棟のみとD期に比べ規模は縮小し、また建物の営まれる範囲は遺跡の北半に集中する傾向にある。

続く8世紀後半（F期※一部9世紀代にも存続する可能性）が、当遺跡における古墳時代から古代にかけての最終段階となる。建物は遺跡の中央西半に集中する傾向にあり、前段階と同じく総柱建物は存続するが（1区掘立柱建物1、同3、同17）、長大な掘立柱建物は姿を消す。ただし前節に述べた「金光」刻書須恵器や円面硯、軒平瓦など官衙的要素の強い遺物は当該期に属するものが多く、生産遺跡としての役割は継続している。またこの段階に至って突如、小型の竪穴住居1基（1区竪穴住居4）が再度営まれている。

F期から大きく間をあけ、中世段階（G期）に再度掘立柱建物7基が営まれる。建物以外にも遺跡南端で井戸（1区井戸）が検出されている。当該期はほとんど遺物のともなわない掘立柱建物を主とし、確度にかけるため時期の細分はおこなわなかった。遺跡の中央東半に四面庇の大型建物（2区掘立柱建物3）があり、同じく西半には両庇の建物（1区掘立柱建物25）がある。また先述の井戸も礎石をともなう井



第235図 古城第2遺跡における建物の変遷

戸枠や曲物による集水施設、砂礫層による浄化装置など、極めて凝った造りの本格的なものである。なお出土遺物より井戸は14世紀後半から15世紀前半、四面庇建物は16世紀代に位置付けられ、当該期の掘立柱建物7基はこの時間幅の中で変遷しているものであろう。

以上が古城第2遺跡における建物変遷の概要である。古墳時代後期末から奈良時代全般（ないし平安時代初め）にかけて連綿とした営みが続けられている。特にB期からD期まで、7世紀代を中心とした時期は遺跡全体が集落域として利用され、建物の数も多く、当遺跡における最盛期と位置付けることができる。ただし、この最盛期の中で遺跡の性格が変質していることが見出される。B・C期は竪穴住居が建物の主を占め、特に大型の竪穴住居の存在から地域の有力者の生活域として機能していたと考えられる。しかしD期以降、F期に至るまでは官衙的要素を持つ大規模な生産遺跡としての性格が色濃く読み取れる。7世紀代に入って有力者の生活域に官衙的な生産遺跡としての要素が加わり、8世紀から9世紀代にかけては生産遺跡としての性格が主を占めるようになったものであろう。

小規模な迫状の地形を挟んで西に隣接する宮ヶ迫遺跡では古墳時代後期・終末期が集落の最盛期と位置付けられ、竪穴住居とともに多数の土器焼成坑が検出されている（宮崎県埋セ2013、宮崎市教委2014）。古城第2遺跡における最盛期とは若干のタイムラグがあるようであるが、古城第2遺跡と宮ヶ迫遺跡をひとつの集落域とした場合、生産遺跡という性格は古墳時代から古代段階に至るまで継続されている。特に古城第2遺跡では国分僧寺との関連が考えられる遺物が出土していることから、古墳時代において地域主導で営まれていた生産集落が、古代段階にいたって国家主導の生産体制の中に組み込まれたものと評価できよう。

中世段階では四面庇、両面庇の建物や本格的な造りの井戸などがある。建物の格式の高さや「古城」の地名からも、当遺跡の形成主体が室町・戦国期の上位権力であったことがうかがわれる。当遺跡は佐土原城下町の東のはずれに位置し、一つ瀬川にも近接していることから、領主権力にとって非常に重要な地理的位置にあると言える。南北朝期から室町初期に当地一円を支配していた田島氏の佐土原城築城以前の本拠であった可能性や、田島氏以降、時には当遺跡からそう遠くない位置にある佐土原城を領国支配の中心とすることもあった伊東氏による物資流通や客館等の交通に関する施設である可能性など、様々想定される。

当遺跡は古墳時代から古代、中世に至るまで、各時代それぞれに特筆すべき要素を持ち、地域の歴史を解明する上で多くの重要なデータを提供する欠くべからざる存在であると言えよう。

参考文献

宮崎県埋蔵文化財センター編 2013『宮ヶ迫遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第228集 宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎市教育委員会編 2014『宮ヶ迫遺跡』宮崎市文化財調査報告書第100集 宮崎市教育委員会